



ぶらり相生第31号

平成30年10月

「万葉集に詠まれる相生」

立秋が過ぎ、季節は確実に秋を感じるようになりました。相高も年度の後半の取組が始まりました。ホームページで日々の取組を発信していますので、ご覧ください。さて、万葉集というと上代の代表的な文学作品で約4500首が残されています。万葉

集に出てくる兵庫県の地名は、明石市関係で、明石の門、明石の浦、名寸隅（明石の海岸）、藤江の浦、淡路島関係で、野島（淡路市）、松帆の浦（淡路市）、その他、武庫川（西宮市）があります。

相生の地を詠んだと思われる歌3首を、今回は、紹介します。

歌聖と呼ばれ、三十六歌仙の一人、万葉集第一の歌人長歌19首、短歌75首が掲載されている柿本人麻呂、宮廷詩人で、代表的自然詩人の山部赤人が相生のことを詠んでいます。それから万葉集の中で、今から紹介する歌のみに登場するのが日置少老です。それぞれの歌をみてみましょう。

「繩乃浦爾 塩焼火気 夕去者 行過不得而 山爾棚引」（巻三・三五四号歌）（繩の浦（那波の浦）に 塩焼くけぶり 夕されば 行き過ぎかねて 山にたなびく）（日置少老）



瀬戸内海航路を船で進み、相生沖を通り過ぎる時に、那波の浦から立ち上りゆく煙に興をもよおして作られた歌です。

次に、紹介するのは、「繩浦従 背向爾所見 奥島 榜回舟者 釣為良下」（巻三・三五七号歌）（繩の浦ゆ 背向にみゆる 沖つ島 こぎ廻る舟は 釣をすらしも（山部赤人）です。

那波の浦から後ろの方に見える奥島の周辺をこぎ廻っている船は、釣りをしているらしい。

最後に、「妻隠 矢野神山 露霜尔 尔宝比始 散卷惜」（巻十・二一七八号歌）（妻ごもる 矢野の神山 露霜に にほひそめたり 散らまく惜しも）（柿本人麻呂）

矢野の神山が露や霜で美しく色付き始めたこの映えわたるもみじもいずれ散ってしまうのだろう 惜しいことであるよ。

歌に詠まれる風情にある相生の風景を味わってみてはいかがでしょうか。

